

3. プレ企画・公開シンポジウムのご案内

日本台湾学会第21回学術大会 プレ企画

映像で知る台湾

民族誌映画「虹の物語」上映と比令亞布（ピリン・ヤブ）監督との対話

日時：2019年6月7日（金）17:00～19:00（16:30 開場）

場所：福岡大学 中央図書館 1階 多目的ホール（収容人数182人）

主催：日本台湾学会、福岡大学福岡・東アジア・地域共生研究所

助成：公益財団法人日本台湾交流協会

協力：国立民族学博物館

企画責任：宮岡真央子（福岡大学）、野林厚志（国立民族学博物館）

司会：野林厚志

趣旨説明：宮岡真央子

使用言語：日本語、タイヤル語・中国語（日本語字幕・逐次通訳付き）

通訳者：石村明子、中恵麗

参加費無料・会員外の方も参加できます。

【上映作品】「虹の物語（彩虹的故事）」58分、1998年、台湾

【監督紹介】比令亞布（ピリン・ヤブ、Pilin. Yapu）

1966年生。台湾苗栗県泰安郷のタイヤル(泰雅族、Atayal)の村マピハウ(麻比浩、Mapihaw)で祖父からタイヤルの決まりや文化を学んで育ち、師範学校卒業後に小学校教員となる。教職のかたわら1990年から村での文化復興と映像の記録・制作に従事。現在、台中市博屋瑪国民小学校校長。他の作品に「霧社・川中島（霧社・川中島）」(2013年)、「祖先の足跡（祖先之脚印）」(2009年)など多数。

【趣旨説明】

台湾原住民族タイヤルは、かつて大人になるために、男女とも顔にイレズミを施した。言い伝えでは、人は死後、祖霊のもとへ赴くために虹の橋を渡る。そのとき、イレズミの有るものだけがこの橋を渡ることができるのだという。このイレズミの慣行は、日本の植民地統治下で禁止され、やがて消滅した。

「虹の物語」のなかで、監督はイレズミを顔に刻んだ最後の世代の老人たちを訪ね、タイヤル語で話しかけ、歌いかける。老人たちは穏やかな笑顔で、イレズミをめぐる記憶や経験を語って聞かせた。古くから伝えられてきたタイヤルの文化が失われていくさまと、それを悲しむ老人たちが映し出される。

作品上映後、監督にお話しをいただく。貴重な映像と監督との対話を通じて、原住民族の文化と経験を知り、台湾を知る機会としたい。そして、文化の消失、継承、共存、創造などについても考える契機にしたい。